

伝統産業による地域振興-大館曲げわっぱを事例として-

経営学部 経営学科 梅村ゼミ
B4R11015 伊藤久美子

【卒業論文概要】

昨今、B級グルメやゆるキャラなど、地域のPR及び振興のために新たな商品を開発しがちだが、地域特有の自然環境と長い歴史が形成した唯一無二の財産である伝統的工芸品を積極的に活用していくことが伝統的工芸品の保護にもなり、解決できる課題もあるのではないだろうか。題材である大館曲げわっぱは、書店のお弁当書籍のコーナーで多くの本の表紙を飾ったり、曲げわっぱお弁当箱専用レシピ本が発行されたりして全国的に知られるようになった。また、2013年に曲げわっぱ職人によって生み出された品物計4点がグッドデザイン賞を受賞した。

伝統工芸品産業は、長年に渡って地域特性を生かして生産を行ってきた産業であり、地場産業の中核を担ってきた。今日の伝統工芸産業が抱えている課題は、将来的に地場産業が直面する課題になりえる。伝統工芸産業を研究することは、地域・まちを支えている地場産業の今後を見通すことにもつながる。本稿では伝統工芸産業が抱える問題を改めて認識しまとめつつ、秋田県大館市が生み出す財産「大館曲げわっぱ」の現状や課題を整理し、「地域活性・まちづくり」の視点から新たな活用の可能性を見出ししていきたい。研究方法としては、主として文献による調査・研究を行うと共に、大館市に店舗を構えるショップへの訪問と取材、そして2017年11月初旬に東京国際フォーラムにて行われた「第34回伝統的工芸品月間国民会議全国大会」の会場で大館曲げわっぱ作り体験をした。

需要の低下、職人の減少、産地での原材料の不足など、伝統的工芸品が持つ課題は千差万別で、一元的に説明できるものではない。その中で大館曲げわっぱ産業は、「人材育成」「ブランド化促進と高収益化」「材料入手難」という課題を抱えているものの、産業従事を希望する若い世代の増加、生産額の上昇、知名度の上昇など良い傾向も見られる。「伝統的工芸品」という高級なイメージはありながらも、製品が日常使いできるのは大館曲げわっぱの強みである。長い年月が紡いできた伝統を守り、時には淘汰してきたことで「大館曲げわっぱ」の地位は今確立されようとしている。そんな由緒ある工芸品の良さを広められる有識者を産地・大館で増やすことが大切なのではないだろうか。今まで曲げわっぱに関する情報はテレビ局の特集だったり工房のホームページやパンフレットだったりが多かった。しかし大館市民全体で曲げわっぱに関する情報を能動的に伝えていこうとすることが、市民も地域の財産の魅力を感じつつ、消費者としてわかりやすい発信できるのではないだろうか。